

開かれた建築を可能にした、優れたファサード環境デザイン

千葉県自治会館

7 本会館は千葉県における自治体(市町村)の交流拠点である。千葉市都心のシビックコアの一角を占め、その意味や役割からも開かれた象徴的な建築であることが求められた。東・南・西の三方が街路に面するという敷地の立地条件に恵まれ、その要求に応えられる解放的な構成が可能であった。この開放性をガラスの立面によってさらに強化することによって、「街に開かれた施設」となることが徹底して意図された。そのこと自体はガラス建築の普及が進んだ今日では特筆することではない。むしろ問題なのは、ガラス建築の表皮がもたらす一方の負の側面、すなわち室内熱環境負荷の増大とそれに伴うエネルギー消費や、内部からの視覚的不安感、そしてメンテナンスである。

設計者はこれまで長年にわたって組織的にその解決に取り組み、さまざまな事例で優れた解法を試みてきた。それらの経験に基づき、本施設では幅70cmのダブルスキンと、その内部で自然換気ができる一層ごとの庇による区画を重層させ、極めて効率の良い、しかも利用者に不安感を与えない手法を開発し適用した。その効果の一端は実測に基づく研究成果に示されているが、利用者からの好意的な感想からも窺い知ることができる。



ダブルスキン内部風景

過剰な環境技術を誇らしげに顕示する建築の多いなかで、本会館では比較的地味だが居住性とエネルギー負荷低減を両立することと、施設に希求された建築表現の実現に重点が置かれた。こうした計画・設計上の取り組みには大変好感が持てる。それだけに、今後の継続的な事後検証と利用者とのコミュニケーションを通じて、意図された会館の機能や性能を持続的に発揮してほしいと願いたい。(岩村和夫)



南側外観



街に対して開かれたエントランスホール